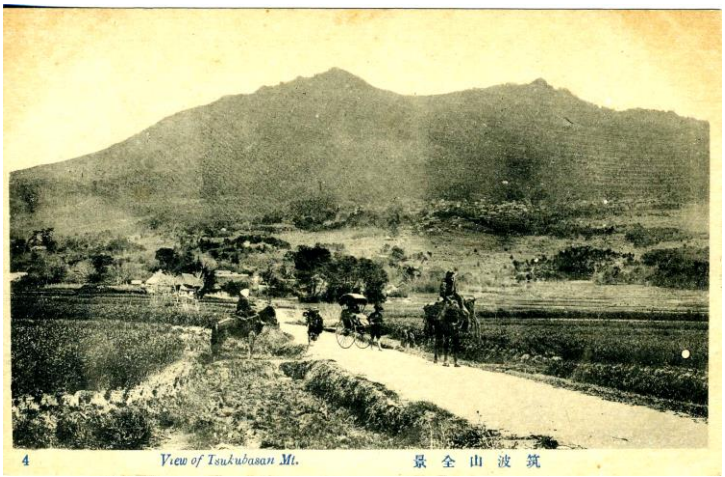
霞 ―2014年度冬季展示室だより―

土浦市立博物館

平成27年1月6日発行(通巻第29号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々のくらし」を総合テーマに、季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞（かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(29) 絵葉書「筑波山全景」



明治時代末期から大正時代初期の筑波山です。写真下に「View of Tsukubasan Mt. 筑波山全景」と印刷されており、ふもとには茅葺きの家並みが、手前の道には馬に乗る農夫の姿や人力車がみられます。筑波山の絵葉書は明治時代末期から現在に至るまで、多数つくられ、販売されてきました。【情報ライブラリー検索キーワード「筑波山」】

目　次

○古写真･絵葉書にみる土浦(29)・・1
○博物館からのお知らせ・・・1
【館長講座及び展覧会と催し物等】
古代の焼き物の生産(古代)・・・・・2
東城寺と結界石(中世)・・・・・・3
老中からの手紙(近世)・・・・・・4
土浦幼稚園の青い目の人形（近代）・・・5
○市史編さんだより・・・・・・6
○地域と博物館・・・・・・・7
○霞短信「民俗資料の整理」・・・・・・8
○コラム（29）・・・・・・・・・8
○情報ライブラリー更新状況・・・8

博物館からのお知らせ

★★館長講座（茂木雅博館長）★★

1月18日（日)、2月15日（日）午後2時～3時30分

「考古学上からみた古代信仰遺跡」　会場：博物館視聴覚ホール

★★参考展示「昔のくらしの道具」★★

1月6日（火）～ 2月3日（火）

小学3年生の校外学習に合わせ、昔の人が使ったくらしの道具をご紹介します。

★★どんど焼き★★

1月17日（土）　午前11時点火　会場：桜川河川敷（学園大橋下）

正月飾りを燃やし1年間の無病息災を祈ります。先着200名にお餅を配布します。

★★はたおり作品展★★

2月21日（土）～3月1日（日）　※詳細はホームページをご覧ください。

はたごしらえ講座受講生とはたおり伝承グループ「綿の実」による作品展です。はたおり体験もできます。

★★第36回特別展「次の世を読みとく―色川三中と幕末の常総―」★★

3月21日（土）～5月6日（水）　※関連イベントの詳細はお問い合わせください。

下記講演会はいずれも午後1時30分～3時、会場は①・②が博物館視聴覚ホール、③は亀城プラザ

①3月28日（土）「宮本茶村と『安得虎子』―幕末期常総地域における知のネットワークをめぐって―」
講師：小森正明氏（宮内庁書陵部）

②4月12日（日）「色川家の薬種業経営」　講師：長田直子氏（恵泉女学園大学）

③4月25日（土）「色川三中をめぐる江戸と地域の文化人たち」　講師：宮地正人氏（東京大学名誉教授）

★休館のお知らせ★
- 毎週月曜日（但し1月12日を除く）
- 1月13日（火）
- 2月12日（木）

★祝日開館します★
- 1月12日（月）成人の日
- 2月11日（水）建国記念の日
- 3月21日（土）春分の日

★特別展準備のため無料開館します★
- 3月15日（日）展示室1・東櫓
- 3月17日（火）～20日（金）東櫓のみ

博物館マスコット
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

２０１４年度　冬季の展示資料解説①　古代

古代の焼き物の生産

―新治窯跡群（にいはりかまあとぐん）と須恵器（すえき）―

土浦市街地から北西の方角をのぞむと、新治地区の山々が横たわり、その奥に筑波山の頂が見えます。冬の晴れわたった日は特にきれいです。実は、この新治地区の山々のふもとには、古代の焼き物である須恵器を焼成（しょうせい）した窯跡が数多く存在し、それらを総称して新治窯跡群と呼んでいます。これらの窯跡の構造は、山裾や台地の斜面部をトンネル状に掘り込んだもので、この中に須恵器を詰め、薪をくべて燃焼しました。窯跡のある場所の下では、かき出された灰や焼き損じた須恵器が多く見つかります。

今回取り上げる須恵器は、一般的には古墳時代の中頃（５世紀）から平安時代の前半（10 世紀）頃にかけて作られた硬質で灰色の土器で、主に貯蔵具や食器などの供膳具（きょうぜんぐ）として使用されていました。その製作技術は５世紀初めに朝鮮半島から導入され、ロクロによる成形と穴窯（あながま）による高温焼成という当時の最新技術が用いられました。もちろん、成形に適した粘土や燃料となる薪の存在も重要な意味を持ちました。

茨城県内における初期の須恵器生産の様子は、かすみがうら市の柏崎（かしわざき）窯跡群などいくつかでみられ、いずれも７世紀前半頃に小規模な生産活動を行いました。この後、中央から地方へ律令制度が波及する７世紀末頃に、県内の二大窯跡群である新治窯跡群と木葉下（あぼっけ）窯跡群（水戸市）が操業を始め、最盛期には県北部と南部で須恵器の供給範囲を二分し、およそ９世紀後半頃まで継続しました。県内ではこのほか、８世紀後半頃になると、二大窯跡群の影響のもといくつかの小規模な窯跡群がみられます。

新治窯跡群の実情は、今までのところ、新治地区の小高（おだか）、東城寺、小野、永井などの山裾を中心に今泉やかすみがうら市域にまで及び、合計 12 ヶ所の窯跡の存在が確認されています。この中で実際に発掘調査が行われた窯跡は、小野窯跡（昭和 28（1953）年調査）と栗山窯跡（平成８（1996）年調査）など意外と少なく、明らかにされていない部分も多くあります。しかしながら、新治窯跡群で生産された須恵器には、土器の中にキラキラと光る雲母（うんも）が多く含まれるなどの特徴がみられ、生産の場から離れた集落遺跡などの消費地出土の須恵器でも同窯跡群で生産されたものであることが分かります。これまでの須恵器の研究によって、その最盛期の流通範囲は千葉県北部や栃木県東部などにも及んだと考えられ、古代の新治地区周辺は東関東を代表する須恵器の生産地であった様子が理解できます。

（関口　満）

発掘された栗山窯跡（市内今泉）

栗山窯跡出土の須恵器など

３／７（土）11 時・14 時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。	下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも古代コーナーに展示） ●小野裏山窯跡出土須恵器 ●石橋北遺跡出土須恵器

２０１４年度　冬季の展示資料解説②　中世

とうじょうじ　　けっかいせき

東城寺と結界石

古代の仏教には清浄な山で修行を行なうことを重視する山林修行の伝統があり、厳しい修行を通じて呪力が得られるとされていました。常陸国では神の山として古くから信仰を集めてきた筑波山が山林修行の場となり、周辺には寺が各所に建てられたことがわかっています。土浦市北部にある東城寺もそうした山寺のひとつです。寺伝では延暦 15（796）年に最仙によって開かれたとされています。最仙は最澄の弟子とも伝えられ、天台教学を学んだ僧であったようです。当初は、現在の境内地の背後の山中にある堂平と呼ばれる地に建てられ、後に今の場所に移されました。創建当初の寺の規模などは不明ですが、古代の瓦が出土しています。

現在の境内地から少し登ったところには、保安３（1122）年、天治元（1124）年の銘がある経筒などが見つかった東城寺経塚群（県指定史跡）があります。経筒の銘文から、延暦寺の僧を勧進とし、常陸平氏の多気致幹が壇越となって経塚が造られたことがわかります。平安時代後期～末期には、常陸南部を治めた領主層の外護を受ける天台宗の寺院であったことがうかがえます。

鎌倉時代になると、西大寺流律宗との関わりも生まれます。建長４（1252）年律宗を東国に広めるため常陸国に来た忍性は、翌年、宍塚の般若寺、小田の極楽寺、そして東城寺に結界石を立てました。律宗では、結界で定めた区域内で僧侶が修行や仏教儀礼を行ないます。その境界を示すために立てられたのが結界石です。東城寺境内にある結界石には、中央に「大界外相」、そして「建長五年癸丑九月二十九日」と年号が刻まれています。

東城寺の結界石で注目されるのは、山裾の集落にも結界石が４つあることです。境内にある年号の刻まれた結界石もかつては同じ集落内にあったもので、これを結界した区域の入口にあたる部分に立て、他の４つがそれぞれ四隅を画していたと推測されます。結界石が囲む区域の地名は釈迦院で、忍性は山裾にあった釈迦院をまず結界したと考えられます。

筑波山周辺に築かれた山寺は廃絶したところが多いなか、東城寺は古代から中世という社会の変革期を乗り越え、今日まで法灯を伝えた点でも特筆されます。

（堀部 猛）

東城寺境内

１／24（土）11 時・14 時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。	下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも中世コーナーに展示） ●東城寺跡出土瓦 ●東城寺経塚の出土品（複製）●東城寺結界石（拓本）

２０１４年度　冬季の展示資料解説③　近世

老中からの手紙

―阿部正弘と大坂城代土屋寅直―

嘉永６（1853）年６月のペリーの浦賀来航は、日本が開国へ向かう転換点となりました。翌年９月にはアメリカに遅れじとロシアのプチャーチンが大坂湾にやってきました。大坂城代土屋寅直＜采女正＞（1820～95）は「大坂は交渉の場ではない」と説得し、プチャーチンは下田（現静岡県下田市）を目指します。ところが、11 月４日安政東海地震が発生し、その津波でプチャーチンが乗るディアナ号は転覆、大破してしまいました。

海に投げ出された乗組員は救出され、伊豆西海岸の戸田村（現沼津市）で船を再建することになりました。近隣の船大工が協力し、天城山の木材を使用した新船は「ヘダ号」と名づけられ、日露和親条約締結後、プチャーチンはこの船で無事ロシアに帰国しました。

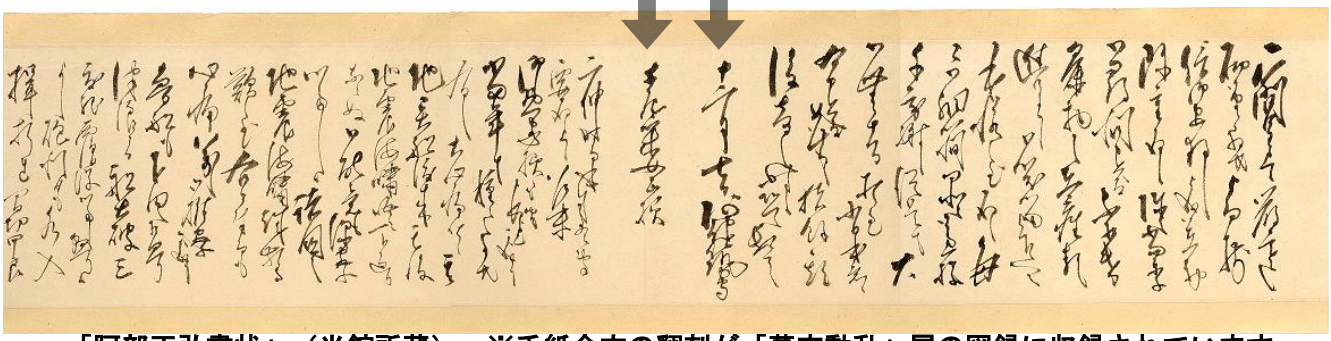
幕府では造船費用を負担しなければならず、老中阿部正弘＜伊勢守＞（1819～57）は「多額の費用がかかって困る」〈安政元（1854）年 12 月７日付〉と、寅直に手紙でぼやいています。海防を奨励した正弘ですが攘夷には批判的で、アメリカなど５ヶ国と和親条約を締結しました。

土浦藩 10 代藩主であった寅直は、天保 14（1843）年 24 歳で奏者番、嘉永元（1848）年 29 歳で寺社奉行、同３（1850）年 31 歳で大坂城代になると、安政５（1858）年 10 月まで大坂で任に当たりました。

幕末の動乱期、江戸と大坂で重職にあった二人は、たびたび手紙のやりとりをし、情報を交換しています。正弘は寅直に対して「大坂市中がよく治まっているので感心だ」〈安政２（1855）年９月 21 日付〉と励まし、「大坂の博徒をしっかり取り締まってほしい」〈安政４（1857）年３月 18 日付〉と要請しました。

政事向きの内容だけではありません。寅直が送ってくれた簪と白粉を家内の女性が喜んだと、正弘は知らせています。上方製品に目を輝かせる武家の女性の姿が目に浮かびます。「唐太宗書（拓本）屏風を贈る」、「玄宗と懐素（いずれも唐代の書家）の書を刊行したので差し上げる」などとも書いており、一つ違いで同年代の二人は、書という文雅の趣味を共有していたようです。　（木塚久仁子）

（宛名）「土屋采女正様」　　**（日付・差出者）「十二月七日　阿部伊勢守」**



「阿部正弘書状」（当館所蔵）　※手紙全文の翻刻が「幕末動乱」展の図録に収録されています。

２／28（土）11 時・14 時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。	下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも近世コーナーに展示） ●土屋寅直書状（江戸時代後期） ●土屋彦直一行書「青松多寿色」（江戸時代後期）

２０１４年度　冬季の展示資料解説④　近代

土浦幼稚園の青い目の人形

―来歴をたどる―

「青い目の人形」と呼ばれる人形が土浦市立土浦幼稚園に伝わっています。昭和２（1927）年に、日米親善のためにアメリカから日本に贈られた１万２千体余りの人形の一つで、「霞」第４号でもご紹介しました。アメリカのものを敵視する風潮のあった戦時下を越えて伝来することから、戦争と平和というテーマで語られることの多い人形ですが、今回はわずかに残る写真にその来歴の一端をたどってみたいと思います。

戦前の人形の姿は、昭和２年の人形歓迎会の写真、「学校経営要覧」（昭和３年）、「保育満了記念」（昭和６年３月、写真①②）に残ります。昭和２年には濃い色の衣服で壇上に、昭和３年には淡色の衣服で応接室に、いずれもガラスケース内に飾られていますが、風貌（ふうぼう）まで確認できるのは写真①です。リボンつきの帽子と淡色のドレスを身につけ、掲載ページには「なみをはるばる渡り来て　ここまでおいでのにんぎょうさん　さびしいようにはいたしません　おくにのつもりでいらっしゃい」と添えられています。盛大に行われたひなまつり（写真②、左上）にも飾られたことがわかります。

戦中・戦後については、書類自体がほとんど残りませんが、青い目の人形は、戦後ひな人形まで焼却される中、「先生がこどもの心理に及ぼす影響を考えてかくまっておいた」（『創立百周年記念誌』）と伝わります。

戦後しばらくしてからの人形は、昭和 28・29 年度の卒園アルバムに登場します。服装は変わっているものの、戦前と同じく遊戯室で行われたひなまつりに飾られました（写真③）。

ひなまつりは徐々に規模が縮小され、人形は出番を失ったようですが、その後も残されました。昭和 48（1973）年には NHK の番組がきっかけで、「青い目の人形」は全国的に注目され、各地で新たに人形が発見されるようになります。そのような中、職員室の片隅に置かれていた人形は、昭和 60（1985）年の幼稚園百周年事業の際に新しい服に着せ替えられ、さらには昭和 63 年の土浦市立博物館開館に伴い、再度服を新調し今に至っています。

（野田礼子）

左：写真①青い目の人形（昭和６年）
上：写真②ひなまつり（昭和６年）
右：写真③ひなまつりに飾られた人形（昭和 29 年）

２／７（土）11 時・14 時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。	下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも近代コーナーに展示） ●市内の商家に伝わる市松人形 ●土浦幼稚園に伝わる市松人形

市史編さんだより

―「大坂御勤番日記」にみる異国船到来への対応―

「異国船の到来」という言葉から、よく知られている「ペリー来航」を思い浮かべられる方が多いのではないでしょうか。教科書で学習した有名な出来事です。嘉永６(1853)年６月のペリー来航は、当時鎖国政策を行っていた我が国に急激な社会と政治の変化をもたらした出来事でした。

それ以前の 1840 年代から日本近海に異国船の出没が増え、当館でお預かりしている古文書の中にもその当時の状況を窺える史料を目にする事ができます。その中の一つ、土浦藩主土屋寅直が大坂城代として赴任した嘉永３(1850)年～安政５(1858)年の「大坂御勤番日記」(西川家文書)から異国船到来に関する記載を紹介したいと思います。

嘉永７年９月 18 日、ロシア政府から派遣されたプチャーチン率いる艦隊が大坂湾に入り天保山沖に停泊、安治川町辺への上陸もあり、海岸を警固する諸侯より御城へ注進があった。御番頭関内蔵助方より内達があり、防御のための御固め役として西川六郎他藩士が出役を命ぜられた。

19 日、夜の明けるのを待ち安治川口を固め、陣所とした。異国人による海岸所々の測量など、いつ何時上陸するか分からない状況の中、藩士の面々は残らず陣中の見廻り等不寝の番で厳重な警備にあたった。

廿日　「御纏番御馬廻り之内ニ而相心得居候様内蔵助方より達有之」
　　「出火有之候節は……火事具取寄候事」
廿一日　「……出役之面々え御手当金被下之……」
廿二日　「……御内々御菓子干魚被下之候旨内蔵助方より達有之……」
廿三日　「……又々御上より薩摩芋頂戴……」
廿四日　「又々御上より御餅弐箱被下置候……」
廿五日　「……海岸出役之面々御手当金割合……」
　　「御軍令廻達相廻ル……」

防御の任務に難渋する出役の面々へお上や内蔵助方よりの頂戴物、また細かな任務心得が通達されるなど長期に亘る藩士への配慮が窺える。

廿八日　「今日異国船へ薪水送り有之候……」

大久保要は異国船に乗り込み、公用人としてロシアの使者と会談、燃料や水などの要求に応じた。

十月朔日　「……異人船近寄居候得共、敢而害心有之儀とは不相聞、万一軽率ニ御取計有之候而は容易不成候間、麁慮之儀無之様末々御人数迄にも不洩様可被御含候……」

異国船が近寄ってきても、むやみに軽率な行動に出る事の無いようにとの急口達が廻る。

十月三日　「今朝五ツ時過より異国船帆を巻揚ケ四方を乗回し、其より南陽へ向て走退候事」

異国船は出帆し退去に至る。

翌年３月、これまでの不寝番に対し賞美として藩士の面々に手当金や料理が出されている。

異国船到来に対して当時大坂城代を務めた土屋寅直並びに御番頭関内蔵助・大久保要らの状況に応じた適切な判断・考え方・対処の仕方が読み取れる史料です。また昨年度末刊行を完了した『家事志』にも、日本近海に出没する異国船の数が増え、ロシアやアメリカ船の情報が土浦の町に入り、町中がその噂でもちきりになった様子が記載されています。異なる史料から同じ時代に起きた一つの出来事について読み解いてみるのも面白いかもしれません。

(市史編さん係非常勤職員　國枝文江)

地域と博物館

博物館をつくる（２）　～どんな博物館をつくるのか～

土浦市立博物館は、市直営の公立博物館で、地域の歴史や民俗を専門分野とするいわゆる人文系博物館として計画されました。とくに、土浦城址二の丸跡に位置し、県指定史跡（本丸・二の丸の一部・櫓門）の亀城公園に隣接する歴史博物館としての性格付けが意義あるものと考えられました。

どんな博物館をつくるのかは、その専門分野や性格だけでなく、建物の外観や構造、施設や設備などのハード面、博物館の運営形態、組織や人員体制、展示の手法や活動内容までにおよぶソフト面など、博物館としての多様な側面に関わる重要な問題と言えます。当館では、できる限り「理想的な博物館」をつくることを目標に、その具体像を描きました。

理想的な博物館の典型的な姿が、「博物館法」に示されています。博物館法は太平洋戦争後、社会教育施設のひとつとして、図書館法（昭和 25 年）についで、昭和 26（1951）年に制定された博物館の基本法です。この博物館法が示す要件を満たし、都道府県教育委員会で審査され、認定された博物館を「登録博物館」と呼んでいます。

最も大切なことは、登録博物館の要件に掲げられている、博物館が果たすべき機能（収集、保存、調査研究、展示・教育普及）を充分に発揮できる施設・設備とそれを動かす博物館の専門的職員（学芸員）との両者を備える博物館をつくることでした。これが、開館後の博物館活動の土台になると考えました。

開館後は、地域博物館としての任務が大切と考えました。地域博物館は、有形無形のさまざまな地域の記憶を刻み、未来に伝える役割を果たします。当館では、学芸員が主体的に調査・研究を継続し、独自の地域史をまとめること、地域資料やその研究成果を蓄積し、広く市民や専門家に発信する情報センターの役割を果たすことなどを指針に、博物館の将来像が描かれました。　　（塩谷　修）

博物館の外観
（外壁は城壁を模しています）

隣接する亀城公園の櫓門
（土浦城址）

霞短信

Kasumi-tansin

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号は、当館非常勤職員の尾曲香織が執筆いたしました。

バックヤードで働く人々②―民俗資料の整理

私が土浦市立博物館の民俗資料の整理に携わるようになったのは、三年ほど前のことです。民俗資料の中でも、いわゆる「民具」と呼ばれるような有形の資料を対象とし、資料の特徴を台帳に書き留め、収蔵庫へと保管することが私の主な仕事です。「民具」は、鍬（くわ）や鋤（すき）などの農具、魚を獲るための筌（うけ）などの漁具のみならず、かつて使用された手動の洗濯機など生活に関わる諸道具も対象となります。ただしすべて受け入れるわけでなく、資料の使用されていた地域が博物館に関わりがあるか、使用していた人及び年代が特定できるかなど、さまざまな条件のもとで収集されます。

台帳作成の作業には、大きく二つの軸があります。一つは資料の外形的特徴への注目です。清掃や燻蒸（くんじょう）（二酸化炭素による殺虫処理）した資料を計測、スケッチし使用痕や傷などの外形的特徴を書き留める作業がこれにあたります。この作業を行うことで、同じ種類の資料のなかで、それぞれどのような違いがあるかを明らかにできます。そしてもう一つは、資料を取り巻く状況の把握です。資料によっては見ただけではわからない使われた時期や使用方法などの情報を補うことが必要になります。その方法として担当の学芸員の調書を手がかりにすることもあれば、博物館から出掛けていき直接寄贈者から話をうかがうこともあります。特に後者については、使用していた人から話を聞くだけでなく、時には資料を使って実演してもらったりもします。この二つの作業を通して、資料を総体的に把握することに日々努めています。

博物館の資料というと古いものという印象を受けるかと思いますが、民俗資料は比較的近い過去の身近なものが対象です。資料整理の作業がそれらをさまざまな側面から捉える手掛かりになること、そしてその資料の展示を通して皆様が過去と現在の暮らしとのつながりを知り、自身の今の生活を考えるきっかけとなれば幸いです。

（学芸係非常勤職員　尾曲香織）

コラム(29)－収蔵庫の増設工事中ですが－

市立博物館は昭和 63 年の開館以来 26 年目を迎えました。この長い年月の中で、博物館の中にある収蔵庫には数多くの資料が収蔵・収納されてきました。それは、市民の方々をはじめ多くの方から頂いた資料や、博物館で購入した資料、館の活動に関わる資料など多岐にわたっています。収蔵資料などが豊富になることで、その活用の幅が広がってきた反面、収蔵庫は所狭しの状態になってきました。

このような状況を解消するため、昨年 10 月から収蔵庫の増設工事が行われています。11 月から本年１月５日までの間は博物館が休館となり、日頃博物館をご利用いただいている皆様には、大変ご迷惑をおかけいたしました。実際のところ、閉館中の博物館内では、コンクリートの壁や天井の一部を取り除くなど、大がかりで相当な騒音の出る工事もおこなわれました。

現在も工事は継続中ですが、展示室の見学やご利用には差し障りのない内容となっております。今回の収蔵庫増設工事の結果は、来館される皆様には明らかな形で見えるものではありませんが、今後の博物館の活動を強力に支える有意義なものとなります。　（関口　満）

情報ライブラリー更新状況

【2015・１・６現在の登録数】

古写真	537 点（＋５）
絵葉書	444 点（＋５）

※（　）内は 2014 年７月 19 日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。１ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ）　２０１４年度冬季展示室だより（通巻第２９号）

編集・発行　土浦市立博物館
茨城県土浦市中央１－１５－１８
ＴＥＬ　０２９－８２４－２９２８
ＦＡＸ　０２９－８２４－９４２３
http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php？code=43

１～５ページのタイトルバック（背景）は、博物館２階庭園展示です。

2014 年度冬季展示は、**2015 年１月６日（火）～３月 14 日（土）**となります。「霞」2015 年度春季展示室だより（通巻第 30 号）は**５月 12 日（火）発行予定**です。次回のご来館もお待ちいたしております。

※展示室だより「霞」は当館ホームページからもご覧になれます。（カラー）